

# 針葉樹会報

1995. 11. 第82号





発行日 1995年11月21日	<b>針葉樹会報</b>  <b>第82号</b>	編集人
発行所 針葉樹会		〒121 東京都杉足立区島根 2-32-19-405
印刷所 篠田印刷		稲毛 尚之



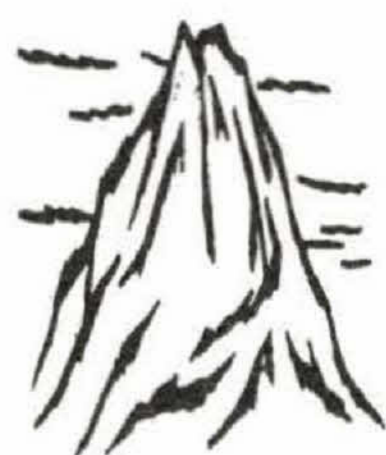
## 針葉樹会報 第82号

### 目 次

ハックルベリーの山	石原 脩	1
『NHKスペシャル チョモランマ遙か』制作ノート	白石 章治	2
久保君を偲んで	佐藤 政雄	7
久保君の思い出	林 正敏	8
久保君の思い出	斎藤 三郎	9
小泉を偲んで	横山 皖一	10
甘利仁朗君を偲ぶ	石原 脩	11
甘利仁朗さん	山本健一郎	13
甘利さんと四峰正面壁	中村 保	14
甘利さん追憶	加地 幸雄	15
甘利さんのことーアンデスの思い出を中心としてー	中島 寛	16
美しい壁	甘利 仁朗	21
会務報告		26
編集後記		26



# ハツクルベリーの山



石原

脩(昭三〇)

カナディアンロッキーから派生した「カスケード山脈」は、米国ワシントン州を海岸沿いに南下してオレゴン州境のコロンビア川に消える。

その全長四百五十キロの内、南半分はレーニエ、アダムス、セントヘレン、の三火山に潰されてはいるが、北半分は奥秩父の高度なのに二千メートル以上には氷河が残り、森林限界の近くにはカールの底に多くの池・湖がある。

この山群のベースキャンプはシアトルである。横浜から船に乗って黒潮に乗ると、最短地は米国シアトル港だそうだが、この港には今では朽ちはたてた石炭ヤードが数多く残り、その昔、日本から多くの出稼ぎ炭鉱夫が渡海した歴史を偲ばせている。

この地は、小生の第二の人生が始まって間もなく建築会社を担当して、旧鉱山の上で高級住宅の建売りをやったので知己が多い。

その折の木造マンションの一室を円高で売りそびれ、これを奇貨として今もカスケード山地の探勝を続けている。

平成六年九月四日。七時半発。ワシントン湖沿いに北上し、右折して最古の街道二号線を東に走る。西部劇風の古い村落を抜け、岩峰インデックスを捲き、レインジャー・ステーションの先百メートルを右折してフォス川林道に入る。八時半。

(真っ直ぐ二〇分でワシントン州ナンバーワンのステイブンスパス・スキー場に至る。靴とスキーを借り、リスト券共で一日五十ドル。) 夜来の雨はあがりきらず、林道は霧に包まれ砂礫の路肩がこわい。九時二十分。道の中央に登山登録所が現れ、林道は終わった。先行者はワゴンとチェロキーの二台。私ら夫婦のフォードRVが三パーティー目であった。

山道は三十メートルはあろうかと思われるモミの巨木を縫って進む。風が梢を鳴らし、寿命が来た老木のサルオガセをゆらす。雲が東にとび、時折陽が洩れだした。

一時間ほどで、一メートルほどのブルーベリーの灌木帯に入ると、モミが小さくマバラになった。

どうもこのあたりの山ではブルーベリーが日本の這松の代役をとめているようだ。

目指すトンガ・リッチの踏み跡を見つけたが行く手の霧の中は巨岩が林立して不安なので、南面を捲くトレイルに入る。トンガ・ピーク五二五八フィートと、ソイヤール・ピーク五五〇〇フィートの間で稜線が見えた。秩父の「ミズガキ」を安易にしたようで、「行ける」と思ったが、ザイルとパートナーに恵まれていないので次の峠までトレイルを伝った。

広い峠は真っ赤だった。岩の消えた行く手の稜線も、右下からのし上がって来た谷も一面に赤い。谷の名がバークリークという意味が判った。「燃える谷」だったのだ。

「赤」は、十センチほどの高山植物となってコケモモ類の本性をあらわしたブルーベリーにあった。黒っぽい実をぶらさげ、上の葉の暗紅色をカーペットのように敷きつめている。

カーペットの中の僅かな踏み跡を見つけ、トレイルから右折し、池糖群を抜け、五二〇〇フィートの無名峰を越え、再び深い森の中を下降すると、今日の目的地フィッシュヤーズ・レイクに着いた。二百メートルの岩壁をめぐらした周囲二・三キロの湖は波一つなく蒼い。

ここまで指導標は皆無で、七万分の一の「グリーン・トレイル」地図が頼りであった。この地図は一枚が二十八キロと十五キロの長方形で

あるが、この中に百近い湖・池があり、フィッシュャーズは中規模の一つであった。

北岸で天幕をたたむ親子と、昼食のサンドイッチをものほしそうに肩越しにのぞき込むヒヨドリに似た鳥が今日始めて会った動物だった。

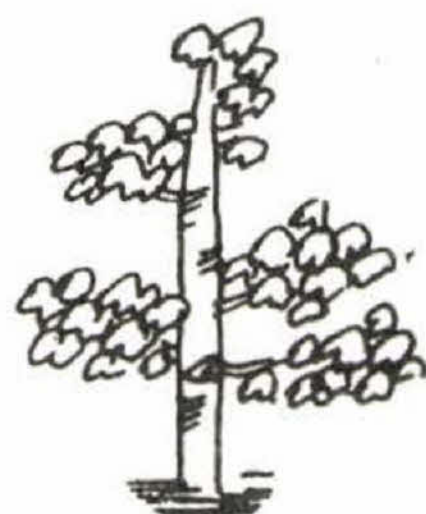
十二時半。帰途につく。一点の雲もなく晴れ上がった空の下は一面の山々で埋まっていた。

ダニエル（七八九九フィート）のリンチ氷河は上部のみだが、右隣りのヒンマン（七四九二フィート）からの六百メートルの落差をもつ氷河が鈍く光って見えた。

女房が三人連れの女性ハイカーとおしゃべりを始めた。「これはブルーベリーじゃなくてハックルベリーよ。（腰につけた大きなコーヒーカーンに八分目ほど採っていた。）いくら採ってもレンジャーは文句をいわない。変な鳥？ それほきっとドロボー鳥だわ。天幕の食べ物を盗むのよ、グリズリーより悪いヤツよ。」

ということならと、それから二人でハックルベリーをドンブリに山盛り二杯ほど摘んだので、車に戻ったら十六時だった。

次はレーニエ山の氷河端のトレッキングに行くつもりだ。



## 『NHKスペシャル

## 『チヨモランマ遙か』制作ノート

白石章治（昭六二）

チヨモランマ北東稜は世界最高峰に残された最後の未踏の主稜線である。この未踏ルートを目指す日本大学エベレスト登山隊に、NHKが同行取材し、NHKスペシャルを報道局で制作することが、正式に決定したのは去年の暮れ、それから、ようやくメンバーの人選が始められた。この時決定していた取材班はわずかに二人、撮影隊長には二回のナムチャバルワ遠征を経験した東野良チーフカメラマン、高所カメラマン及び撮影隊登山管理を担当する日大OBの村口徳行氏、札幌放送局から派遣される清水義浩カメラマンの三人のみであった。報道局上層部は、四人目のメンバーとして番組を担当するディレクターを探していた。

私に内々の打診があったのは一月下旬、当初は固辞した。針葉樹会先輩諸氏は「好きな山に会社の金で行けるのに、何でや？」と不審に思われるかもしれないが、私なりの理由があった。それは、私がこの遠征に参加することは、

すなわち、私が番組を制作することに他ならない、本当に日大隊に同行取材するだけで番組がつくれるのだろうか、プレモンスーン期において、無酸素のアルパインスタイルの速攻登山が脚光を浴びている現代において、日大隊のような酸素とシェルパに大きく依存した旧来の極地法での登山が番組になりうるのだろうか、それが私の最大の不安であり、疑問であった。

「そんなカッコエエこと言うならオマエが登ってみい」と御叱りの言葉が飛んできそうではあるが恐縮ながら申し上げると、テレビ屋というのは、所詮他人のふんどしで相撲を取るのである。自分には甘くとも他人にはトコトン厳しい、そうでなければ、躊躇なく番組など作れないのである。また、私個人にも避けたい理由があった。学生時代のヒマラヤトレッキング三昧で自分の身体をもって実証した揺るぎない事実、「私は高度に弱い」のである。その上、私の腹は、日頃の不摂生飽食三昧でピア樽状態、駅の

階段を昇るのも、息が切れてしまう虚弱体質と化していた。この身体で「六〇〇メートルを越える高所で取材をせよ」と言われるのは正直に言って命の危険を感じてしまう私であった。

しかし、ついに恐るべき業務命令は発せられたのである。一二月月上旬、私の上司であるHプロデューサーとSプロデューサーは二人掛かりで私の懐柔説得に乗り出した。

「白石、身体が不安なら、ヤクという牛がいるだろう、アレに乗って前進キャンプに行けばいいじゃないか」（ホントにこう言った）と優しく語りかけてくるHプロデューサー。「ハァー（あんなものに乗れるわけじゃないじゃない）」と思いつつ頷くしかない私。

「寒ければ寒いなりに、防寒対策をしっかりやっていけばいいだろう。例えばホカロンを大量に持っていくとか」と本気か冗談か分からない笑みを浮かべるSプロデューサー。

「お心遣いありがとうございます」と健気に振る舞うしかない悲しきサラリーマン。

「白石、おまえは本当に幸せな奴だ。世界で初めてハイビジョンでヒマラヤを撮影し、新しいドキュメンタリーが開発できるのだから、ホント恵まれた奴だ」。

いつもながらのSプロデューサーのありがたい言葉である。上司のおだての言葉に弱いのはサラリーマンの宿命である。この性格が功をな

したか、災いと呼んだか、報道局に配属以来、人の行きたがらない被災地、紛争地取材に明け暮れる毎日であった。のべ半年にわたる炎熱のカンボジアでのPKO及びポルポト派の取材、食料も水もほとんど断たれた中での奥尻島での地震報道、デング熱で四〇度の高熱にうなされながらも取材を続けたタイ・ミャンマー国境の出稼ぎ村、やってる時は早く東京に帰りたくて仕方がなかったが、今となっては旧き良き日々の思い出である。ならば、いずまいを正し思わず私は答える、「やれる範囲でやってきたいと思います」

Sプロデューサーは私の弱気を見逃さず、たみかけてくる、

「やれる範囲とは弱気じゃのう、お前も男なら立派な番組を作ってこんかい」

結局、叱咤激励の罵声がとぶのである。

三月上旬、ネパールのエベレスト街道、私は四〇〇〇メートルを越える高度で喘いでいた。やはり、私は高度に弱かった、頭が痛い、一歩が重い、どうしても先に進まない、昨日宿泊したペリチェのバッテリーでほとんど食事を摂らなかつたにもかかわらず、朝から下痢に悩まされていた。食べると、すべて吐いてしまう。ベースキャンプ入りを前に暖かい南のネパール側で高度順化訓練である。

日大の登攀隊員はずっと先を歩いている。そ

れを先まわりして、カメラマンの村口氏は二〇kgほどあるカメラを背負い取材している。八七年の防衛大の西稜、八八年の三国合同隊とエベレストに二回の撮影隊として参加した経験のある村口氏は日頃のトレーニングと自己管理が徹底していて本当に強い、ビデオエンジニアとして参加している井納氏も懸命に調整している。二人ともフリーランスだ、この人達は本当の意味でのプロであった。また、全員をまとめる撮影隊長の東野氏も五〇才をこえる年令でありながら、日大隊の登攀隊員よりも強い、やはり日頃の鍛練の成果である。それに比べて私のこの情ない身体は、何とかならないものだろうか、「後悔先にたたず」である。

思えば、この番組を担当するのが決まったら日本出発までの二カ月間、実に忙しかった。出発前の私の主要業務は、番組の構成表を書くことである。構成表とは、簡単に言えば番組のあらすじである。「なに、遠征に行く前から粗筋ができているからヤラセが行なわれるのではないか」と疑惑の眼差しを向けられる諸兄もおられると思うが、断じて違うのであります。まず、番組のディレクターは、事前に取材を行い、そこから、あらかじめ予測できる事柄をシュミレーションしておかねばならないのです。なぜなら、テレビはカメラで撮影しなければ元も子もない、よって何か出来事が起きそうな時には、

カメラマンがいつでもカメラを廻せるようにその場に待機していなければならぬ。ディレクターのロケにおける主要業務とは、この事前の調査と調整、簡単に言ってしまうと、「段取り良く行なう」ということに他ならない。第一に日大隊の隊長の神崎忠男氏や登攀隊長である古野淳氏らに取材を重ね、日大隊の実力と性格を把握し、彼らの考えているタクティクスを理解せねばならない。

取材の結果判明した日大隊のタクティクスとは、「北東稜を二五人のシェルパと、酸素ボンベなど大量の物資を持ち込み、完全な極地法を用いて北東稜を攻略する」というものだった。

そこで私は今度は「過去八隊がなぜ失敗したのか」を取材する。エベレスト南西壁の初登を指揮したボニントンの「LAST UNCCLAIMED RIDGE」を読む、また初めてピナクル帯を突破したラッセル・ブライス氏に国際電話がかける。

そして導きだされた結論、「これまで失敗したクライマーは無酸素でトライしていた。(大宮隊の日本人隊員は除く)」。これには頭を抱え込んだ、難問である、どうやって番組にするのか悩み続けた日々であった。しかし、悩みながらも仕事に追われる毎日であった。日大との様々な打ち合わせを始め、三カ月もの海外出張の経費の見積もり、フリーランスの人々を雇用するに

あたったの契約や保険など事務的な手続きに忙殺された。その上、阪神大震災も地震の次の日には現地入りして、三日間完全徹夜を強いられた。そして、ついに出発直前、B4に一〇枚以上、全部撮れば少なくとも5時間の番組は作れる構成表を完成させた。要するに何を撮ったらよいのか、どうやって番組を作ればよいのかが分からなかったのだ。

私は五〇〇メートルをこえるヒマラヤの高地で薄い空気に喘ぎながらも、懸命に高度順化を行っていた。私は経験的に知っていた、「ビスターリ、ビスターリ」急ぐ必要も無理する必要もないのである。高山病に罹ったら、ささと下山するのが一番なのである。私は「ナムチェバザールまで下山したい」と撮影隊長の東野氏に訴えようとしたが、ベテランの東野氏は私の心を見透かすようにこう言った。

「白石君、さすが伊達にトレッキングはしてないね。ゆっくり負荷をかけていくのが一番なんだよな、明日も頑張るよ」

私は生涯二度目のカラパタル登頂を成し遂げた。しかし、これまでの好天とは違って変わりエベレストにはガスがかかっていたため何も見えることはできなくて残念であった。エベレスト街道の帰り道、五〇代の日本人トレッカーがひとり亡くなっていた。トレッキングで亡く

なる方は相当数いらっしゃるらしいが、観光イメージが悪くなることもあってあまり公表されないらしい。ヒマラヤトレッキングでは無理は絶対に禁物である。

三月二四日、ついにチョモランマのベースキャンプに到着した。日本を出発してから既に一月以上が過ぎ去っていた。二月下旬カトマンズ入り、三月上旬までエベレスト街道で高度順化訓練、いったんカトマンズに戻り、中国ネパール友好道路が開くのを待って、ザンムーからチベットに入り、ニエラム、シガールを経て車でBC入りした。日大隊は、この春一番乗り、登攀隊員や学術隊員は二〇名ほど、シェルパはサーダー、クライミングシェルパ、キッチンをあわせて三〇人ほど、合計五〇人の大部隊である。報道はNHKの八人に共同の記者・カメラマンの二人である。NHKの陣容は、職員がカメラマンが東野、清水、音声の斎藤、映像技術の蔵田、ディレクターの白石、契約スタッフとして高所撮影の村口、高所の映像技術の井納、外国隊とのコーディネートとして續女史である。今回の遠征は八八年の三国合同に次ぐ規模のもので、九〇年代では最大、欧米のクライマー達は今世紀最後の極地法による大遠征隊と呼んでいた。

今回のNHK取材班の特徴は、高画質のハイビジョンシステムを使用して撮影することであ



る。ハイビジョンはカメラとレコーダー、それらを駆動させるためのバッテリーを合わせれば七〇kg以上、通常の取材に使うカメラ一式の五倍以上の重量がある。これを五人のシェルパに協力してもらって運び上げるのであるが、機械はデリケートで、撮影準備のためのウォーミングアップに時間がかかり、正直閉口した。そのため、ハイビジョン取材のサポートとして最新の現行システムのカメラも持ち込んで取材にあたった。

三月下旬のチョモランマBCは零下二〇度程もあり、乾燥した風が吹き荒び、とにかく寒かった。六五〇〇メートルの前進キャンプまで、ヤクによって荷物を運ぶが、チベット人のヤク工が雪と寒さを嫌って、荷物が進まず難渋した。もちろんNHKの撮影機材や登山資材も上げるのにも苦勞した。

私といえば六〇〇〇メートル以上は未知の高度だったので、多少の不安もあったが、最初の前進キャンプ入りでは先頭をきって登るまで高度に順化し、皆から「ネパールでは仮病をつかっていた」とまで言われる程になっていた。不思議なもので前半とばさなかったことが幸いし、最後まで体調は良好であった。身体が馴れてくれば登りたくなるのが人情であるが、その気持ちはぐっと押さえた。私は山に登りにきたのではない、あくまで番組をつくりにきたテレビ屋

なのである。

神崎隊長が心臓を患い前進基地に行くことにドクターストップが掛かったので、登山隊の指揮は、急遽参加が決まった池田錦重副隊長が取ることになった。日大隊を北極点に日本人として初めて到達させ、五〇才を過ぎてからもチョオユーやダウラギリに登頂したベテランの登山家である。この人の登山に対する考え方は明確であった。「絶対に犠牲者を出さない」とにかくヒマラヤに限らず登山は事故が多い、山で死ぬのはやはり避けねばならない。組織登山において事故を起こし人が亡くなれば、その登山は失敗である。そういう意味で池田氏の考え方は間違っていない。しかし、欧米のクライマーが無酸素のアルパインスタイルというシンプルながらスタイルでめざした北東稜を、日本人が莫大な費用を使ってシェルパに大きく依存して登ることにとどのような意味があるのか、今だに私にとっては理解不能である。その点で池田氏とは立場が違ってはいた。しかし、池田氏は生意気な私に対しても懇意にしてくださった。自分では「雇われマダム」と自嘲気味に語っておられたが、六五〇〇メートルの高所に連続二〇日以上も滞在して、隊員の指揮を鼓舞し、シェルパにうまく話をつけながら成功に導かれた。その組織の長としての努力と手腕には脱帽の連続であった。四月下旬、我々は望遠レンズで北東稜最大難

所のピナクル帯の仕事を撮影する毎日であった。ピナクル帯は八〇〇〇メートルをこえる岩峰群で北東稜最大の難所である。第一ピナクルの手前、七八五〇メートルの地点に第五キャンプが建設された。ここからシェルパも酸素を使った。酸素を吸ったシェルパはやはり強い。グングン上に、ルートを延ばして行く。シェルパはエベレストにおいてもはや高所協力員などではなく、立派なガイドの役目を担っていた。一シーズンのシェルパのサラリーは二五〇〇ドル、高所に荷揚げすれば、サラリーはその分加算される。登頂すれば特別の報奨金も払われる。池田氏はこうしたシェルパとの金銭面の交渉も一手に引き受けていた。現在ではシェルパは完全なプロフェッションナルとして登山に参加しているのだ。日大隊の登山は、シェルパの力量をうまく使ったという意味で現代的ではあった。

我々が解像度の高いハイビジョンに望遠レンズを装着して取材する一方、工作隊に同行したのは村口氏と井納氏であった。この両名は登山家としての経験も力量も、登山隊の誰をも凌いでいた。番組を見て頂いた方なら誰もが感じる印象は「カメラマンの方が登山隊より強いのではないのか」と。撮影した村口氏は、日大山岳部のOBであったので、何回も今回の登山に参加しないかと誘いを受けていた。村口氏は常々「自分の納得できる自分の山登りをしたい」と

もらしていた。スケール感のある村口氏の映像、山岳カメラマンとしての実力は日本でも第一級である。シエルパ達からの信頼も篤く、冗談でサーダーからどうしてアタックに行かないのかと冷やかされていた。村口氏は八三〇〇メートルの第二ピナクルまで、カメラと自分の個人装備と合わせて二〇kg余りを背負って、北東稜で登山隊に同行した。これこそが本当は特筆されねばならない記録である。

日大隊ばかり追っているようでは番組にならない。これはNHK取材班の共通した認識であった。現在のエベレスト・チョモランマを象徴するクライマーはいないか、我々は、チョモランマベースキャンプを探し回った。コーディネーターの續女史は、ラッセル・ブライスの公募隊と一緒に入山してきたが、その中にトム・ウィッターがいた。左足の膝から下を失いながらも、登頂への意欲を燃やすアリゾナ大学のプロフェッサーである。彼はウィットに富んだフランクなアメリカ人だった。彼は自分のハンディについては、もはや克服しているように振る舞っていた。しかし、「なぜ登るのか」という我々の質問に対し、はにかみながらこう答えた。

「僕は身体の不自由な人間としてできる限りのことをしてきた。しかし、ハンディを持つ人間が生きていくのは、想像するより大変なことなんだ。その社会的な地位が向上するためには、

まだまだ多くの努力が必要とされる。今回の登山は、自分という人間を通してハンディとはどんなものか、私を見てハンディを持った人々を勇気づけることができればと思っている。それが私がエベレストに挑戦する理由だ」

なんとという理想主義、やはり世界は広い。その後トムとは前進キャンプで何度かあった。義足では下る時、足に負担がかかり辛そうだった。あの陽気なトムが、自分の自信を失っているのはよく分かった。しかし、彼は最後まで挑み続ける姿勢を持っていた。残念ながらトムは頂上には届かなかった。しかし、私は今回の取材で出会った人の中で最も強く感銘を受けた。トムは本当に頑張った、最後まで自分の山登りに徹したクライマーだった。

今年のチョモランマで最高のクライミングを成し遂げたのは、アリソン・ハーグレイブスであった。無酸素でシエルパレスで登りきった。最初は我々は登れないと思っていた。また、二児の母親である彼女が、なぜそんな危険な登山をするのか理解できなかった。登山の前の取材では、かなりナーバスになっていた。彼女のテンションの高さは短距離走者にも似たものがあつた。登頂を果たした後ではアリソンの雰囲気は一変した。彼女は今度は我々の質問に丁寧に答えてくれた。彼女は自分の登り方を危険な方法とは認識していなかった。リスクは考えられる

限りのことを尽くして回避していた。

「八〇〇〇メートル以上ではできるだけ滞在時間を短くすることが重要なよ、それがリスクを少なくするための絶対的な条件なのよ。私は二つの選択肢がある時、かならずより困難な方を選ぶ、それを無事にやってのけるのよ、それが私にとって満足だから」。

アリソンは一刻も早くスコットランドに帰り、六才の息子と四才の娘に会うことを楽しみにしていた。登山と二人の子供という行為と存在、その両方でバランスを保っているとも語っていた。彼女が何を考え山に登り、どこへ向かおうとしているのか知りたいと思った。

——アリソンはチョモランマから戻って、スコットランドで二週間の休暇を楽しんだ後、エベレスト登頂からちょうど二カ月の八月二三日夕刻、K2に登頂後疲労凍死のため亡くなった。アリソンは日大隊の登山に対しては「それが彼らのやり方ならば、それはそれでよいことだ」と思う。しかし、私なら私の登り方で登る。それが私のやり方だからだ」とだけ静かにほほ笑みながら語った。

五月一日中国時間午前九時、日大隊は未踏の北東稜から登頂を果たした。「天気にも恵まれた日本隊が組織力と資金力で登った」と大半の欧米の登山家は考えている。そして、日大隊の登山が自分達のそれとはまったく別のものだ

認識していた。単純な話である。例えば海に潜るとしよう。人間が生身の肉体で素潜りで潜ると、酸素ボンベを背負って潜るのが、まったく違う行為であるように。

日大隊の登山は終わったが、私は日本の公共放送のひとりのテレビ・ディレクターとして六〇分の番組を作るといふ仕事が残っていた。私にとっては、登頂は折り返し点であった。

それから三カ月をかけて番組を作った。四畳半ほどの狭い編集室に籠もって、ときどき徹夜しながら、一〇回以上の編集を繰り返し、コメントは二〇回近く書き直した。

放送の直前、アリソンが死んだというニュースが入ってきた。すぐさま番組は若干手直しをしなければならぬことが決まった。真っ先に頭によぎったこと。

「やっぱり死んだ、死ぬべくして死んだ」

番組は夏のNHKスペシャルで最高の視聴率を取った。放送が終わった夜、街に彷徨い出て正体不明になるまで痛飲した。徹夜徹夜で傷みきった身体にアルコールを流しこみながら「俺はいったい何をやっているんだ」と思い、むしろに虚しくなった。



## 久保君を偲んで

佐藤 政雄（昭一七）

学生時代、久保君をリーダーに級友五・六人で秩父縦走や三ツ峠に出かけ、二人で岩登りをした懐かしい思い出があります。

又、御両親が極めて如才なく、便利な渋谷駅前材木店を営まれ、合宿の準備や遭難事故の対応等の拠点に利用させて頂きました。卒業後は大阪商船会社に就職しましたが、暫くして退職し、一時神奈川大学で講師を勤め、その後家業に専念されました。

世の中が安定してから、渋谷の店や如水会館で吾々前後の針葉樹会員が集まり、食事をし乍ら、雑談を交わし、彼がノートを持参し、記録して居りました。

健康の為か、毎週か毎月か奥さんを連れて高尾山に登っておると聞き、感心したものです。七〇才を過ぎても国内は勿論、ヨーロッパまで孫の娘さんを連れて、スキーを堪能して居り驚きました。

登山を愛好するのは結構なことですが、山の混雑、ルール無視の暴走は全く腹立たしい。昔の静かな山が懐かしいです。

のんびりムードの慎重居士の彼が、なんで飯豊山で事故を起こしたか。登り優先のルールを主張するかのよう。僅かな転落で打ち処が悪く半身不随、車椅子の生活になりました。

事故の本質とは、一寸とした隙か、運命的と云うべきか、誠に恐ろしく不安になります。

松下順吉君や奥村一郎君の協力で、彼が敬愛する山岳部、針葉樹会創立の中川先輩を始めとする交友、登高の記録を整理し、「山と人と」を執筆され、自分の人生を総括されました。

六月一九日の級会が最後となりました。顔色が悪いなと思った。山の仲間、級の友人が又一人減った。今は唯、静かに君の御冥福を祈るばかりです。

さようなら

# 久保君の想い出

林 正敏(昭二七)

昭和十二年四月、商大予科に入学、小平の寮に入った。その新入生歓迎の宴で、隣りの食卓の向い側に坐った男が、背は小柄だが声は胴間声で大きく、同じ新入生らしいがいやに突慥貪な物言いでは話をしてる。妙な奴がいるなと思つたものだった。何日かたった夕食の折、ふと見ると彼は学生服の胸ポケットに野の花をさして隣りの食卓に坐っている。なんとも珍妙、誰かにしきりに冷やかされていたが、テレ臭そうにしていた彼の眼が、ふとこちらの眼に合うとニヤリと笑った。久保孝一郎との出会いだった。

彼は入学早々に山岳部に入り、こちらは他の運動部を流れて途中入部。彼の方が山岳部では先輩だった。あの小柄な身体でキツリングをゴツソリ膨らませて、ガッチリと独特の歩き方をした。冬の乗鞍合宿ではスキーも程々にこなしていた。

その彼が調子を下げだした。昭和十五年の秋頃からだったろう。山日記をなくしたので月日はさだかでないが、上越の土合の駅を出て一行のしんがりを久保と一緒に歩いていたら、いく

らも行かぬうちに、調子が悪いから帰ると言い出した。例の通りのぶっきらぼうで、よろしく伝えてくれと言うと、呆気にとられているこちらにお構いなくスタスタ帰ってしまった。新宿駅の夜行列車を待つ間に調子が悪いからと言って、独り帰ってしまった話を聞いて心配もした。確かに健康上も体調を崩しているな、と思われる節があった。然しそれ以上に、その年の夏合宿の友田純一君遭難が心の奥に支えているのだらうと思われた。

昭和十六年十月、甲武信遭難の折には、木賊小屋のわれわれの搜索現場に対して、当時、既に物資不足になってきたのに、何かと貴重な食糧を里から補給してきた。聞けば、麓の広瀬の部落には同期の根本がいて、東京には久保がいて、搜索本部になっている渋谷の久保の家から送ってくれるのだという。遭難再発とその搜索に、第一線で働けぬ久保の並々ならぬ思い入れを感じ、久保家には一方ならぬお世話をかけていることと思つたものである。

久保のおやじさんが昭和十六年十二月、渋谷

区の区會議員に立候補することになり、その手伝いに十二月十日、久保家の二階の選挙事務所になり出された。その夕方、ラジオの臨時ニュースはマレー沖で日本海軍航空機がイギリス東洋艦隊の戦艦二隻撃沈。そのうちのプリンス・オブ・ウェールズは不沈戦艦とまで言われていたので、八月の真珠湾攻撃にも劣らぬ大戦果と自賛する海軍報道部の発表。よくやったと選挙事務所が湧き返るなか、ふと見ると久保の顔からはいつの間にか笑みは消えていた。

山田亮三、根本大、そして今、久保孝一郎。三人目の山岳部同期が逝った。

昭和十五年代、部員の数も増えて山岳部の第二の黄金時代を目指していた頃、三人はそれぞれの個性をもって山岳部を指導していた。その最中に起きた友田純一君の遭難、その反省から体制をたて直している矢先の甲武信の遭難、衝撃は更に大きかった。そして時代も厳しい道を進んで、現実には太平洋戦争に突入していった。時代認識に独特の鋭さを持つ山田の心理的振幅。そして久保も又意外に高揚と深沈の落差が大きかった。

その久保が、おそらくはその心理的屈折をひた隠しに隠したのであろう、後輩に対するおおらかさは常に失わなかった。

彼は山岳部室の牢名主のようなものだった。講義には出ないが午前中は図書館、午後は部室

の前庭に焚火を焚いて部員が来るのを待っていた。彼は好んで後輩に、われわれの同期や先輩に議論をふっかけさせて、自分は後輩の肩を持つアジテーターの役をかって出た。アルピニズム論争ともなればいつ果てるともなかった。

彼は部誌、記録をつけるように、と几帳面なところがあつた。日誌は毎日、最後に部室を出る者が記録するよう喧しく言うが、大方は彼が書くことになった。

彼の酒は余り強くなかったが呑んで談論風発を好んだ。ホンノリ色になると笑い上戸になるのである。某月某日の部誌にドイツ語でただ一行「ツヴァイザイデル・ゲシュテルンアーベント」誰が書いたのかすぐ判つた。

彼は部室に時々宿りこんだ。シユラフザツクを準備しての冬の夜、木炭を使い損って一酸化炭素中毒、夜中に戸外にとび出す一幕となり、付き合った後輩（誰だったか忘れた）がこぼしていた。

部室では山田と根本が話しこんでいる。外では後輩部員が落葉焚きの準備をしながら、何やら議論をしている声が聞こえていたが、久保が例によって中に入って調子が上つたようだ。太田「べくさん」の坊やの声が聞こえてくる。

冬日さす、部室の前の木立はまだ暖かいようだ。あれから既に半世紀を越える。卒業と共に東京を離れ、戦後、久保が一変して旺盛に山歴を

重ねていると聞きながら、北に南に居を移し、山からも遠ざかった。古稀を迎えて漸く東京に落ちついた私は、五十五年前、上越の土合の駅はずれで別れた久保との山行のやり直しを……

最早やかなわぬこととなつてしまった。私の「久保君の想い出」は「青春の部室」が一番よく似合う。合掌

## 久保君の想い出

斎藤三郎(昭一七)

昭和一二年四月、商大予科の一年一組に入れられて教室で五十音順に久保、小泉(私の旧姓)とならんだ時から、三年間久保君の背中を見て過ごすこととなった。初対面の時可<sup>べ</sup>さんの弟のような風貌でポツポツと高邁なこと言うので凄いのが前にいるなと思つたが、暫くで普通の仲間になつてしまった。

山岳部には最初山田君と私がいって、すぐあとに久保君がはいってきた。その後次々とふえて賑やかになった。三年生は大塚さんと日江井さんで皆活発に動いていたと思う。久保君の合宿参加は昭和一二年暮れの徳沢合宿からだと思ふが、その時は私も一緒にリーダー岩崎さんで徳本越えで帰つた。その後も合宿にはよく行ったが、不思議なことに二人だけで山へ行った記憶がない。

学部に進んでから久保君も私も健康上の理由

もあつて山の第一線から段々と後退して部室でごろごろしているようになった。まだ久保君の方がいくらかまじだつたような気がする。秩父遭難の時なども久保君の家が東京の本部になつて我々は後方要員を務める形になった。昭和一九年の一〜三月私は軍隊での教育を受けに東京へ来ていたが、その時久保君と佐藤君が兵隊にもいかずに東京にいて、時々久保君の家で会つたりした。私には戦前の久保君の家の渋谷と今の渋谷がどうしても全く結びつかない。

戦後間もなくの頃私の地方のブナの木に興味があるお手紙をくれた事があつたが、一時は材木屋をやるうと考えたのかもしれない。何れにしても久保君が自分のスタイルの山行きを確立したのは中年以降で、その頃から健康にもなつたし、スキーも上手くなったような気がする。この二〇年程の間に一〇回程山行きの誘いを受

けたが一度も行けなくて今にして悔やむ思いが強い。私の仕事が暇になった頃電話をくれてスキーに行かないかと言う。行ってもよいが何処だと聞くと、オーストリアだと言う。とても自信がないのでお断りした。

もう大分前になるが、同期の久保、根本、佐藤の三君が白山に登るので私の所へ寄ってくれた。私は一緒に行けないので一夕愉快に過ごして翌朝伴に別当の出合いまで送らせた。ところがその夜根本君が室堂から電話してきて、実は久保君の家からお父さんが危篤だと知らせてきたが、久保君は明朝早く登頂してすぐ下山すればよいと言っているが、早く帰るべきだと思うがどうか、と言ってきた。それは少しでも早いがよい。明朝早く別当まで迎えを出すからとして、結局小松まで送って汽車で帰った。あとでお父さんの最後には間に合ったと連絡があった。

久保君は老境に近づいてから海外旅行やスキーによく出掛けたが、予科の三組の旅行グループにはいつて奥様同道で何度か行ったようである。三年前に私もそれに加わって久保君と共に北歐、オランダ、ベルギーを旅行した。久保君が愛用のリュックを背負って、骨の折れた傘をさして、例の足取りで飄々と小雨のブリュージュの石だたみを歩いていたので今もはつきり想い出す。これが最後の海外旅行になったのではなからうか。昨年の秋久保君の家を訪ねた時、家の中でも

車椅子でそれは我慢できるが、体全部の神経痛には何ともたまらないと珍しく弱気なことを言っていたが、私は生命のある間は何としても生き通さねばと行って別れた。今年の年賀状に心強いことが書いてあったのでますますと安心して

## 小泉を偲んで

横山 皖一 (昭二七)

三月二一日電話を取ると小泉が亡くなったとの連絡。

その時深田久彌氏の特別番組が放映されており、茅ヶ岳の墓標にお酒を供えているのが印象的だった。続いて穂高、笠、剣の山々が映り、過ぎ去った時間が戻ってきた。

昭和二五年、夏山合宿の北岳、小泉はサブリーダーだった。今は廃道となった赤薙沢から広河原へ。広河原では岩魚釣りにタバコを頼まれ、一箱を分けてあげると二〇匹以上の大岩魚。焚火を囲んで私達だけの素晴らしい入山式。一番大きいのは私、次は小泉だった。翌日は半分潰れかけた大樺小屋をベースに偵察。それから私達だけの北岳生活が始まり。パーティを分けてのバットレス登はんを楽しみました。農鳥から西山温泉へ、一〇日ぶりに初めて逢うのは

いたが、遂に永遠に旅立たれてしまった。その時帰りの汽車の中でも読めよといって朝比奈菊雄著「アルプス青春記」をくれたが、これが久保君の形見になってしまった。

男か女かと小泉とビールをかけたのも楽しい思い出。

その年の冬合宿は遠見尾根から五竜岳、一橋として戦後初めての冬天による登山でしたが小遠見に天張った先発隊のラジュース取扱の失敗によりテントの一部炎上。登はん隊の横山と小泉は灯油の生焚で朝の食事を作り、テルモスのお湯とカンパンだけで出発した。頂上での写真を見ると真っ黒な顔の二人だった。頂上近くで一緒になった慶応隊の二人と共に下山を開始、私達持参のザイルで急斜面の下りは楽だった。テント場に戻ると天候がおかしくなっている。応急修理のテントなので、遠見小屋までの移動を決定、ワカン組には迷惑を掛けたが小屋に着くと同時に一二月末の大雨、私と小泉の結果オーライの決定だった。

卒業後の山行も剣、笠などなどとスキー、宇佐美合宿と楽しい思い出にあふれている。

一九九四年二月四日太田先生の奥様、お嬢

様方を囲んだ如水会の一夜が山仲間の会合の最後だった。一月に入院してからも元気一杯の毎日だったのだが……。

合掌

## 甘利仁朗君を偲ぶ

石原 脩 (昭三〇)

甘利仁朗君享年六十二才。これからという時に残念でならない。

四十三年前の昭和二十七年春、国立の部室は新入部員で溢れんばかりであったが、中でも立川高山岳部で冬山も経験したという甘利（呼びすてご免）は目立つ存在であった。

しかし、中国では尊敬の的となる関羽型の風貌ながら、ニコニコと人なつっこく、細心でシャイなこの男の中に、壁にとりついた時の抜群の天性と闘志が隠れているとは夢にも思わなかった。その天性に触れた最初は、小平分校の中庭であった。芝の上を端から端まで空中転回で横断した彼の姿が今でも目に浮かぶ。きちんと両足が爪先まで揃って、腹・背筋の強さを示していた。この彼と私がザイルを組んだのは三回のみだった。現役時代では一年生の彼と四峰の明大ルートと甲南ルートをトレースしたのが全てだった。

甲南のハングは、庇状の上に手が届くからと、私がトップでアブミで越えたが、彼はアブミに足を掛けずにバランスで上って来た。

この年の山岳部の状況を針葉樹第十一号から抜粋する。「(二十七年)十月。此れより新制部員のみ山行が始まる。時に三年部員は欠員で、旧制本科三年及び新制四年は同時卒業の為、新制二年部員が雪山への準備をする。此の時の部の可動人員は二年六名、一年十七名。雪山の経験者はその内四名であった。」

この四人の内の一人として、甘利仁朗は二十八年三月に岳沢生活を経験し、ジャンダルムと西穂高に登っている。

そして、翌年度の実働三十人の一橋山岳部の中で貴重なリーダーとなったので、その後は、一緒に山へ行っても、二人だけでの登攀を楽しむ余裕は失われてしまった。

三度目にザイルを結んだのは五年後の一の倉

だった。甘利は南稜テラスで雲表クラブの松本氏に烏帽子の奥壁の夏期ルートを指差しながら聞き終わると、南稜の予定を変更したいと言いだした。その年の三月に夏期ルートを登るつもりが、先行した雲表パーティーについて、凹状ルンゼを冬期初登したので、この秋に変型チムニーで名高い夏期ルートを登りたいということであった。

嫌も応もなく、烏帽子スラブを戻り始めたので、私は卒業後手入れしていない鋏靴が不安になり、雲表さんからワラジを貰って、山本(健)と共に後を追った。取付きのニピッチのスラブと変型チムニーで久し振りに見た彼の登攀は、一流の名に値する見事なものであった。

彼をとりまく当時の山岳界は、三の窓・屏風岩・奥又白・滝谷・一の倉で、夏・冬も殆ど同時の初登争いが熾烈であった。そして彼が在学した昭和二十七年から三十三年の間と、その翌年までが最も過熱した時であった。

二十九年の夏合宿は、総勢二十六名が濁沢生活を楽しんだが、先発の甘利仁朗(当時三年生)を含む七人が、五日間、奥又白で岩登り生活をおくった後に本隊に合流した。

この夏の終わりに、紫峰山岳会の仲間と奥又白を再訪した彼は、懸案の四峰正面を、北条・松高両ルートからトレースしている。以降、彼の名前はその一度会ったら忘れられない顔と共に

に、山仲間知られていった。この頃の彼の奥又白・四峰正面への気持ちは、「かつて怖れと憧れをもって仰いだ壁を、私は今安らぎと懐い出のうちに仰いでいる。」と針葉樹十一号に記している。

そして、三十二年三月に松高ルートの積雪期初登に成功したが、彼は、この為の留年であったと余人に語っていた。

当時は、夏期に冬の固定ザイルが何処に張られたかが話題になったが、その一つに北岳バトレスの中央稜があった。

三十三年正月。RCCのプロデューサーを自任する飯田橋の山道具店「梓」店主である奥山章氏とその秘蔵っ子吉尾弘・小板橋徹両氏に、どのような経緯があったかは知らないが、芳野満彦氏と甘利仁朗が加わって中央稜の初登が行われた。戦前の北岳バトレスでの偉業を誇りとする一橋山岳部OBとしては、この登攀への甘利の参加は嬉しいニュースであった。

同じ三十三年の十二月に、十人余の若手OBが、芳野氏が小舎番をつとめる徳沢に合宿し、取り残されている甲南ルートの初登を含め、奥又白に展開したが、悪天候と雪崩事故で手間どる間に、雲表の松本パーティーが屏風の中央カントから四峰甲南ルートに連続登攀中のコールを間近かに聞く破目となった。

翌々日、壁全体から滑り降りてくるチリ雪崩

の為に、甲南ルートどころか、第一テラス手前で石原・山本組は引き返し、同じく明大ルートから下って来た甘利と、C沢全面の雪が動く中を肩を並べて歩いたのが彼との山での懐い出の最後となった。彼にとってのこの山行は、五泊して前穂に抜けた松本氏の「スーパードルピニズム」幕明けのコールを連日聞かされ、心中穏やかではなかったと思われる。

この年からボルトを使い出した次世代の山屋たちは、ここ迄の登攀を「クラシック」と稱する。甘利もまた、この後は、連続登攀をそして海外へと転身していくこととなった。

七年七月十一日。私は、八王子本立寺で故人となった甘利仁朗の告別式の後、お斎の席で献杯を指名された際に、約百人の親族・業界の人々に「甘利仁朗君の山」を紹介したが、その終わり、ペルーアンデス山上の一ヶ月半が、彼にとって人生を凝縮したような素晴らしい時間であったろうと結んだ。

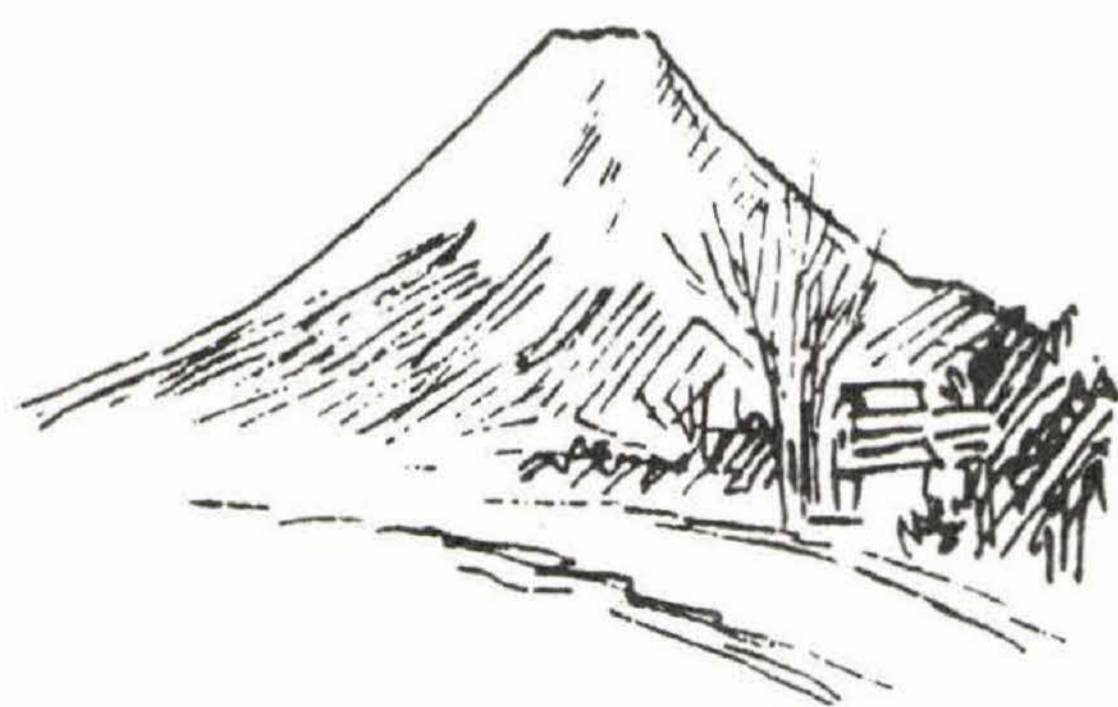
そのお斎の会でのハプニングは、飛び入りで十人ほどのパートタイマーの女性群が会場の正面に並び、甘利仁朗社長が、梱包・発送をするアルバイトの人々にも優しい気遣いを見せる人であったと涙ながらに語ったことであった。

吉尾弘氏は、その著「垂直に挑む男」の中でこう語っている。「甘利さんという人はおかしな雰囲気を持った人だ。彼がいるといたないとで

は私たちの雰囲気違ってくるのだ。たいていクライマーといわれる人たちは、多かれ少なかれ独特の悲壮感をかもしだすものだが、彼にはそれが無い。私が今迄接してきた人たちとは異質なクライマーだった。」と。

喪主の息子さんは、「父の心の底が判らず残念」と挨拶されたが、私も同じ気持ちだった。今となっては、当山岳部の戦後ナンバーワンのクライマーとして、部に在籍した全員の中で、また、ウーロン茶や薬膳茶の香りの中で君が生き続けることをもって瞑すべしと申し上げたい。

合掌





# 甘利仁朗さん

山本健一郎 (昭三)

平成七年七月七日私は早池峰に登った。朝六時十五分に小田越しを歩きだし、頂上に着いたのが七時四十五分、それから人気のない静かな稜線を早池峰ウススキソウの大群落を愛でながら中岳、鶏頭山とのんびり歩いて岳の部落に降り一時半頃宿に戻ったら、主人が家から電話があったという。いぶかりながら電話をして甘利さんが亡くなったことを知らされた。宿の外に出て雲一つない青空と歩いてきたばかりの緑の稜線を見上げながら、今聞いたばかりの知らせを、自分に言い聞かせようとするのだがとても信じられなかった。こんなに明るい穏やかな日に、あまりにも不条理な知らせをうけて私の頭は混乱するばかりだった。

昭和二十八年の春、国立の掲示板に自分の受験番号を見つけたときから、山岳部にはいるつもりで、親戚からももらったお祝いをかき集めて四ッ谷の高橋にトリコニーの七号を打った靴を注文した。山岳部の最初の会合で明るく存在感のある甘利さんに始めてあったが、一年上とは

見えず四年生かと思うくらい貫祿があった。しかし見たところ山登りに向いた体型でなく、その時はあんなに優れたクライマーとは思わなかった。

この年の夏は剣沢での合宿、天気にも恵まれなかったが半日の晴れ間に別山の岩場に行くことになり、甘利さんと始めてザイルを結んだ。甘利さんとはこの後何度もザイルを結びあう機会があったが、これが初めてで印象深い。この時は、トラバース中に二人の間の四メートルくらいの高さの岩柱がゆらゆら揺れて傾きだし、大音響とともに落ちていったが甘利さんは顔色ひとつ変えず悠然としていた。それにしても、どんなに傾斜のある雪の上でも岩場でも平地のようにいつてしまえば、恐ろしく早いには降参した。

翌年の夏四峰を登って奥又側の四・五の雪渓をグリセードで降りていたときにも、何とか追いつこうと頑張っただけでひっくり返って、クレバスに頭からはまり引きずり出してもらった。一番迷惑をかけたのは三十年の春の前穂の北

尾根の時、三・四のゴル雪洞に二人で何日も閉じ込められようやく奥穂に登った帰りの事だった。吊尾根の最低鞍部あたり、夏道がちょっとしたピークの岳沢側を巻いているが、幅五十センチほどの夏道はべったりと雪が乗り雪の壁になっていた。そこを雪面に顔を向け、夏道とおぼしきあたりをけこみながら甘利さんが横にへつっていった。私もそのステップをたどっていったが西日に照らされ腐っていた雪がすーっとくずれ、今度は全体重が掛かったもう一方の足場も崩れてしまった。アツという間におお向けに空中に投げ出され、上高地が逆さに見えたと思っ

たら逆さのまま両肘が岩にぶつかり、また空中を飛んで妙な姿勢で落ち、三度目は長いこと空を飛んでいた。ああもう駄目かと思っていたら腐った深い雪の中にどすんと着陸した。こちらにも慌てていて、歩けるかどうかためそうと体操の真似をしていたら甘利さんが大声で叫びながら雪の詰まったルンゼを駆け降りて来るのが見えた。稜線に登り返しながら目測したが、落ちた高さは約三十メートル、今でも河童橋から落ちたところがよく分かる。ほうほうの体で降りついた雪洞で、その晩甘利さんは何度も私が落ちた夢をみてうなされ大声で叫んだ。

この二度の事故で私が死ななかったのは、甘利さんのように運の強い人と一緒だったからにちがいない。しかしたびたび迷惑を掛けるのは

心苦しいので、この後は張り合っついていくのは止め、遅れてもマイ・ペースでいくことを心掛けた。こう考えを改めてからの方が、比較的上手くパートナーを勤めることができたような気がする。

そのような時に迎えた三十年の暮れの鹿島槍のカクネ里ピークリッジP1の登攀は、一番印象深く思い出に残る。初めから終わりまで苦しかったが、吉田さんの名指揮のもと小人数で素晴らしい成果を上げたし、甘利さんのパートナーを一番うまく勤められた山行だったような気がする。

そして最後にザイルを結びあったのは三十三年の十月、一の倉の烏帽子岩奥壁で石原さんも一緒だった。南稜か四ルンゼあたりを登る積もりが、南稜テラスに行ったら甘利さんが烏帽子の奥壁を眺めこちちに行こうと言い出し、石原さんが閉口したような顔をしていたのを思い出す。結局甘利さんには逆らえず、ハーケンとカラビナをあまり持ってこなかったのを悔やみながら取り付いた。烏帽子沢スラブのどんづまりから右上に登る最初のピッチを鮮やかにこなし、いく甘利さんの姿が今でも目に浮かぶ。登り始めたのが遅く、沖の耳に着く頃に暗くなり霧になったので、肩の小屋に入り寒い一夜を過ごして下山したが、楽しい登攀だった。この後も春先の山スキーに何度か付き合ったが、六十二年の五月青森の一戸義孝さんのグループと酸ヶ

湯に泊まっていたら、夕食のとき目の前に甘利さんが現れびっくりした。急に思い立って飛行機が取れたのでやってきたという話だった。この二つともいかにも甘利さんらしい懐かしい思い出である。

甘利さんは縦走は好きではないので、岩登り

## 甘利さんと四峰正面壁

中村 保 (昭三三)

をしなくなってから一緒に山に行く機会が減ってしまい、ときに山スキーのお供をするだけだったのは残念である。こんなことになるならもつと一緒に山に登っておけばよかったと悔しい思いをしている。

一九五六年一月、冬山がひどく荒れた年でした。正月休みも終わり、三学期が始まるうとしていた頃、穂高奥又での二重遭難の報がとびこんできました。前穂北尾根四峰正面壁を狙って入山していた甘利さんのグループ(紫峰山岳会の仲間)が、関西K会のメンバーの奥又A沢での遭難の捜索に向かい、自分達も雪崩に巻きこまれたらしいというニュースでした。急拠、佐

藤さん(昭三十一年卒)と私が立川から中央線に飛び乗って松本にむかいました。沢渡から、いっこうに天候が回復しない降雪のなか、小休止も惜しんで上高地に急行しました。中の湯から雪崩の危険地帯を通過し、釜トンの入り口にさしかかろうとしたところで、下山してきた三人に行き合いました。が、こちらの心配をよそ

に、開口一番の言葉は「これからどこを登りにゆくの」でした。こちらはしばし無然としましたが、重苦しい緊張感から解放されて、無事喜びあったものでした。甘利さんのお父さんは松本駅前の旅館の仮の遭難対策本部に陣取っておられ、われわれを凱旋將軍のごとく迎えてくれました。

このときの登攀は不成功でしたが、甘利さんの四峰正面壁への思い入れは、単に功を競うという次元ではなく、魅惑されつづけた憧憬の壁といえるでしょう。翌五七年一月、再びアタックし悪天候にはばまれましたが、同年三月に松高ルートの積雪期初登攀を成し遂げました。この登攀では終始ザイルのトップにたち岩と氷のクライミングをリードしました。折しも、尖鋭

的な登山に志を同じくするクライマー達が第二次WOCを旗上げし、甘利さんはその中核的な存在として活躍しました。山と溪谷社から依頼されて「山と溪谷」九月号に訃報を書きましたので、紹介させていただきます。

『小谷部全助を輩出した戦前の東京商大の伝統を受け継ぎ、戦後の一橋大学山岳部の中興の祖となった甘利さんは、大学山岳部の枠にとどまらず、第二次RCCの創設に参画し、一九五〇年代の後半、日本のスーパードルピニズムの幕開けにつどった群像のひとりでもあります。

その輝かしい記録は『登攀者』（一九六三年・山と溪谷社）に凝縮されていますが、なかでも前穂高北尾根四峰正面壁（松高ルート）（一九五七年三月）、北岳バットレス中央稜（一九五八年一月）、谷川岳一の倉烏帽子沢奥壁（一九五八年三月）の積雪期初登攀は後世に残るものです。

甘利さんは奥又白をこよなく愛し、四峰正面壁は掌中の玉のようでした。クライマーらしくらぬ体躯と、風貌に似あわぬ人なつこさと、繊細な感性は仲間から敬意をもって親しまれました。同時代の尖鋭的な登山家たちの記憶に残っているでしょう。

甘利さんの登山の対象は、やがて、ペルー・ボリビア・アンデスやヒンズークシュに広がってゆきました。そして、さらに、活動の舞台は、

夢とロマンを体現する場として事業の展開に力を注いでゆきました。南極オキアミの資源保護プロジェクトに熱中し、また、中国・福建省から烏龍茶の輸入・販売のビジネスに先鞭をつけました。つねにパイオニアワークを希求した人でした。』

甘利さんは戦後の日本におけるアルピニズム

の勃興期に輝かしい足跡を残し、その積雪期初登攀はグラウンド・スラムに値するものと言えましょう。外にも広くかわりを求めた甘利さんですが、一橋山岳部の牽引車であり続けただけでなく、もっとも深く心の絆を感じていたのはわが針葉樹会の仲間でしょう。

## 甘利さん追憶

甘利さんが亡くなって世の中が少し寂しくなりました

加地<sup>ち</sup>幸雄（昭三三）

一生<sup>ざん</sup>鑽山の甘利さんでした。入部当初「奨岳金」という言葉を破顔一笑教えてくれました。月見の宴で陶酔「鑽山賦」を歌うあの恵比須顔がつい最近のように瞼に浮びます。

山気に冷えんとするすっぱだかの甘利さんを探らえました。しかし山本さんにとっては遺憾千万、遁走中の後姿です。今は昔の話です。

一九五七年の春山でしょうか。横尾の岩小屋をベースとして五・六のコルを経、三・四のコルからアタック・パーティーの甘利さんと山本さんが吊尾根を通過して奥穂登頂。その帰途上高地で山本さんのカメラが、入湯直後早春の雪と



# 甘利さんのいっしょ

—アンデスの想い出を中心として—

中 島 寛 (昭三六)

アンデスのアポロパンバ山群での登山を終え、チョコニャコータ谷のガレ場にさしかかった時のことである。石塊にまじって、よく見ると、アンモナイトと思われる化石、それも大きなものが幾つもあるがっている。

「こりゃ大発見だぞ。学術的にも価値があるだろうが、日本に持って帰れば間違いなく高く売れる。売り先なら俺にあてがあるが、問題はどうかやって運び出すかだ。売れたら金は山分けということにして、力自慢のお前が担いで下ろしてくれないかな」

興奮した面持ちの甘利さんが、こう云って私の顔をのぞきこむ。

いつもは物静かで温和なのに、何かひらめいた時の甘利さんの顔つきは、とたんに厳しくなる。目つきが鋭くなり、威厳が加わり、相手に有無を云わせぬ迫力がみなぎる。

私は蛇に睨まれた蛙のようなものである。や

むなく三十キロ以上はある化石をザックに入れ、

腰が抜けるのではないかと心配しながら、おまけによせばいいのに、二回も下の平原まで担ぎ下ろすはめになってしまった。それから大変だった。トラックの通れる道路まで、馬の背に

振り分けにして運んだのはいいが、重い化石はバランスをとりにくいため、時々ずれ落ちる。

その度に馬がとびはねて崖から落ちそうになるのが可笑しかった。そしてトラック、船で日本へ。

しかし、こうやって苦労して持ちかえった化石も、どうやら全く陽の目を見なかった。甘利

さんも、結末はあまり話したがらなかったが、風の便りでは、甘利家の風変わりな庭石ぐらいにはなったらしい。

いきなり変な話で恐縮だが、アンデス遠征の時の甘利さんというと、まっ先に想い出すのがこのエピソードだ。

甘利さんと云えば、時代の先端に行く先鋭的

なアルピニストだった。生活も山中心で山のために二年も留年し、山に打ち込む姿勢は求道者のだった。いつもシャイで控え目で、手練手管や曲がったことが嫌いだった。自己顕示やハッタリとも無縁だった。その風貌と雰囲気から甘利天皇とも云われていた。しかし、それは尊称というよりも愛称だった。大らかで人なつこく、小さなことにはこだわらなかつたから、憎めな失敗談や面白い逸話がいろいろ残っているが、そのことよってかえって甘利ファンがふえていくというのも甘利さんの人柄によるものだ。

一橋大学アンデス遠征隊は、母校の創立八十五周年記念というお墨付きも戴いて、実に多くの方々のお力添えのお陰で実現した。一九六一年(昭和三十六年)、今から三十四年前のことである。一橋山岳部にとっても、長年の夢がかなった、最初の海外遠征であった。

メンバーは吉沢一郎隊長以下七名、甘利さんは副隊長だった。吉沢さんもまだ若く、当時五十七歳だった。それでも、隊長だけが三十歳以上年齢が離れていて、隊員は、副隊長も含めて全員二十代だったから、吉沢さんが一番苦労したに違いない。ということとは、われわれが苦労をかけたということである。吉沢さんにとっては、生意気盛りの“子供”六人を引き連れた、重責を負った長旅、というのが実感ではなかつたか。

甘利さんの立場は、いわば、吉沢一家の長男として、隊をとりまとめるコオディネーターだったが、それはけっして甘利さんの得手ではなく、また、実際のところ、そんなことはどうでもよかった。甘利さんの存在自体が大きな意味をもっていた。

大学山岳部では、一世代（四年）離れていると、気持ちの上で年令以上の大きな隔たりがある。その上、学生あるいは卒業したての最年少組である中川、倉知、私にとっては、甘利さんは、輝かしい山歴からしても、正に雲の上の人だった。一緒に登れるだけで幸せだった。

それに、アンデスでの登攀、とくに、出くわすことが多いであろうアイスクライミングの場面では、かなりの技術的な困難が予想されただけに、百戦錬磨の甘利さんがいてくれるだけで安心という気持ちは、全員がもっていた。

幸い、アンデスに残された最後の六〇〇〇メートル峰と云われたプカヒルカ北峰（六〇五〇メートル）を初め、全部で十七峰に登頂し、うち十一峰が初登という成果を収めることができた。ビバークを強いられた登攀も幾つかあったし、登山の内容としても、大いに手応えのあるものだった。

当然のことながら、甘利さんから学んだものは多かった。甘利さんは小太りの身体に似合わず、俊敏で身のこなしも軽く、かつ腕力も強かつ

たが、登り方は慎重で堅実だった。ルートの選択眼も厳しかった。それに、寡黙だけれど、心の中は情熱の固まりのような人だった。だから言葉でなく行動で考えていることを示すタイプだった。従って、駆け出しのわれわれ最年少組は、特にあれこれ教えてもらったわけではないが、ザイルを組んで一緒に登りながら腕を磨き、次第に甘利さんの山を見る目、山に向かう姿勢に染まっていった。そういう意味では、アンデスでわれわれは、甘利さんという師匠に弟子入りしたようなものだった。

アンデスでの体験を振り返ってみると、もうひとつ、いろいろな交通手段を使って、何日もかけてペルー、ボリビアを縦横に走りまわる大旅行だったことが印象的である。

登山期間だけでも三ヶ月、経済調査を含めると、遠征は八ヶ月に及ぶ長期間だった。その上、プヤ山群のように、われわれにとって初見というだけでなく、大げさに云えば、人類にとつての“地図の空白部”に初めて足を踏み入れる貴重な機会に恵まれ、登山の喜びもさることながら、探検というかパイオニア・ワークの面白さを身をもって知ることができた。倉知や私にとって、そこからヒマラヤへの窓が開かれたと云える。

そして、甘利さんが、優れたクライマーである以上に、あるいは、それだからかもしれない

が、未知の世界への関心が強く、探検的行動に旺盛な意欲をもっていたのがうれしかった。山村のケチュア族やアイマラ族の部落では、彼らの生活ぶりに関心を示し、彼らと積極的につきあおうとしていた甘利さんの姿が目につかぶ。

事実、甘利さんが酒を飲んで夢を語る時は、その当時話題になっていたヨーロッパの三大北壁などではなく中央アジアをラクダで横断して、タクラマカン砂漠の涯の天山山脈の山々を登ることだった。たしかに、甘利さんとシルクロードはピッタリ波調が合っていた。後日、自分の会社の社名を「楼蘭」としたことは、けっしてたまたまのことではないであろう。二人のお子さんを北京大学に留学させたり、中国での事業をライフワークと心に決めたことにそれがよく現れている。

アンデス遠征隊は、チームワークがよくて楽しかった。しかし、一度だけ進路をめぐって大議論をしたことがあった。

チョクニャコータのBCで、いよいよ最後のプヤ山群への移動を控えて準備に忙殺されている時だった。

甘利さんの頭のなかには、アポロバンバ山群の山々を登っている間中、ラパスに着いてすぐ、近くのチャカルタヤスキー場を見た、要塞のような未峰の岩峰ティキマニ（五八〇〇メートル）の姿があったようだ。多くのヨーロッパ隊の挑

戦を退けてきたこの峻峰を、われわれの総力を挙げて攻撃してみてもどうか、今回の遠征の集大成として、これがアンデスの登山だという実験をやってみないか、というのが甘利さんの意見だった。それに対して、隊長の吉沢さんは、登山はアクロバットの遊戯ではない、それをやりたいなら、改めて別の隊を組織して来たらいいじゃないか、未踏のププヤを探るという当初計画に邁進すべし、と強く主張した。

この両論をめぐって、全員で喧々ごうごうやりあった。結局、ププヤへの道を推し進めることになり、ププヤでは、各自思う存分腕を奮い、充実した登山を楽しむことができたのだが、この時は、クライマー甘利の登山観とともに執念の一端を垣間見た思いがした。

しかし、ププヤに移り、偵察でププヤ山群の山々を初めて確認した時に、もっとも興奮し、闘志をみなぎらせたのも甘利さんだったことは、同じ甘利さんの一面として、あえて強調しておきたい。

アンデス遠征が終わってから、私は、あいにく病気のため裏方にまわらざるをえなかったが、倉知君が中心になって、ヒマラヤ遠征の計画を推進した。アンデスの時の中村さんの役まわりを倉知君が背負ったことになる。迂余曲折を経て、最終的には、一九六七年山本健一郎隊長以下八名でヒンズークシュに遠征し、サラグラ

ル南峰（七三五〇メートル）他二峰の登頂に成功したが、この準備の道程でも陰に陽に若手を励まし、精神的支柱になってくれたのが甘利さんだった。

そもそも、一九六三年の十月に、甘利さんが仕事でヨーロッパに出張した帰途、スカルドを訪問したのが計画の発端だったし、一九六五年には、自ら隊長となり、丸子、佐藤（之）両名と一緒に偵察隊としてヒンズークシュに入り、本隊の登山許可取得交渉とあわせて、ミール・サミール峰（六〇五〇メートル）に登頂したことが、計画を実現する上で大きな推進力になった。

甘利さんは、針葉樹会の会合にあまり顔を出さなかったし、会報にもそれ程寄稿していない。しかし、針葉樹会への愛着は人一倍強かった。特に若手への期待が強く、“人真似でなく人がやらないことに挑戦するパイオニアスピリット”を一橋大学山岳部の伝統として伝えていきたいという意欲を常に持ち続けていた人だった。

甘利さんの思い出でどうしても書いておかなければならないのがイナンナ・クラブのことである。甘利さんのイナンナ・クラブに托した思いついては、針葉樹会報第四十八号（一九七六年十二月刊）の「アドヴェンチャーへの新しい道——イナンナ計画——」に詳細に述べられている。

このプロジェクトは、近い将来に予想される世界的な食糧危機に備えて、南極オキアミを国

際管理にすべく、キャンペーンを展開し、必要な行動を起こそうというもので、最初は、金子健太郎氏のドラム缶イカダによる太平洋横断を支援したが、これが失敗に終わった後、次第に同志をふやし、幾つかの大学探検部の学生たちを組織し、世界キャラバン隊を派遣し、人類の現在と未来に対する提言をとりまとめようというところまで広がっていた。スポンサーであり、オーガナイザーであった甘利さんは、これを新しい時代の「社会的冒険」であり、冒険の自力更生をはかるものだとして位置づけ、莫大な個人資金をつぎこんで取り組んだ。甘利さんにとって、登山でのパイオニアワークの終焉を受けて、活動を社会的なレベルに広げ、かつ国際的に通用するものとしたという気持ちがあったようだが、結末はどうなったか定かではない。私自身は仕事の都合や海外勤務のためもあって、ある段階までの事情しか知らない。

そもそも、甘利さんから「まとまった資金が手許にあるのだが、事業に使う気はない。自分で何かやるには年をとりすぎたが、本当のアドベンチャーを志しながら資金のために行き詰っている人やグループがあったら支援してみたい」と相談をもちかけられたのが発端だった。そこで金子健太郎氏を紹介したのは私だったから、せっかくの大金を“太平洋に流してしまった”責任の一半は私も負わなければならないのだが、

この場合も、甘利さんがひとたびこうと決めて動き出すと、誰も止めようがなかったことも事実である。しかし、甘利さんはイナンナ・クラブの活動を通じて、将来のために種子を播こうとしたと見ることが出来る。金子氏はその後亡くなったらしいが、大学探検部の学生たちやイナンナ計画のために集まった若者たちのうち何人かでも、ただ甘利さんの企画にただ乗りしたのでなく、甘利さんの意図を体してたしかかな心の触れあいを確認し、経験を共有し、播かれた種子を育てていく努力をその後も継続していつてくれているのであらればうれしい。

甘利さんは、どちらかと云えば筆不精だったが、書いたものは、どれも情感のこもった名文だった。「山と溪谷」に寄稿した前穂高四峰正面壁積雪期初登の記録「美しい壁」はその代表的なものとして云える（別稿参照）。

たまたま、針葉樹会員のたまり場になっていた「みね」に残されたノートのかなに次の文章を見つけたので最後に紹介しておきたい。

「このノートの最初によごすのが篠原の死であることが悲しい。最も死にそうもない奴が最初に死んじまう事が否けない。どう見ても不思議だ。考えられない事だ。しかし、あいつは往ってしまった。ヨハネスなんていうあいつに最もふさわしい土地で天国に参った。あいつが死ぬなら最もあいつらしい地で昇天したことがせめ

ても事だったのだろうか。彼のあのファイトとバイタリティーが全く惜しまれてならない。篠よ、きつとお前はヨハネスの空からヒマラヤの峰々を、白く輝く峰々をながめて楽しんでるのであろう。そんな気がしてならない。昭和三十九年九月、甘利仁朗」

篠原さんは、三菱商事の駐在員としてヨハネズブルグ滞在中、交通事故で亡くなった山の仲間である。この甘利さんの言葉をそのまま甘利さんに送りたい。会う度にリタイヤしたらヒマラヤに行こうやと云っていた甘利さんの早逝が残念である。ご冥福をお祈り申し上げます。

合掌





1961年8月 ポリビア・アンデスのアポロバンバ山群にて。  
 後列左 中島 寛、ポリビア山岳会：マルティネス  
 前列左 甘利仁朗、中川滋夫



1961年6月 ペルー・アンデス、コルディエラ・ブラニカ山群、プカヒルカ峰のベース・キャンプにて。  
 後列 丸山則二  
 二列目 甘利仁朗、高所ポーター・アンヘレス兄弟  
 前列 吉沢一郎 中島 寛



# 美しい壁

甘利 仁朗

奥又白の池畔にテントを張ったことのある人なら、誰しも四峰のあの豪壮なバットレスの量感を胸に焼き付けられてしまったことだろう。

ハクサンイチゲとシナノキンバイの群落に囲まれたあの小さな好ましい池面に映える、黒々とした夏の正面壁。それにもましてすばらしいのは、深々とした雪の起伏に覆われた池のほとりから仰ぐ、氷雪をまとって巖とした冬の正面壁である。私たちはそれを穂高に残されたもっとも美しい未登の壁と考え、その壁に魅せられてしまった。そして四年間、私たちはその積雪期の登攀を試み続けた。

まず、昭和二九年三月、水島在身、永光俊一の二名が初めて新村ルートに取りついた。しかしこの時は、偃松テラスでビバークした翌日、例の大ハングで撃退された。第二回は昭和三一年一月、水島、永光、甘利の三名で再び新村ルートに向かい、一度目は甲南ルート第二テラスからのトラバース、二度目は同テラスから青白テラスへの直上という三つの新しいルートによってこれを試みたが、いずれも失敗に終わり、偃

松テラスに達することすらできなかった。第三回は昭和三二年一月、水島、永光の三名で、二度新村ルートに取り付いたが、雪の条件が悪く、日没までに偃松テラスに出ることができなかった。そしてそれ以上試みることは水島の勤務の都合が許さなかったため、そのまま下山しなければならなかった。

しかし敗退を重ねれば重ねるほど、私たちはますますこの壁に惹きつけられていった。それは私たち三人の至上の憧れとなり、私たちは自分たちの全ての生活が内面的にも外面的にも、何とはなしにこの壁に結びついていくのを感じていた。そしてその後、私たちは四峰をねらう幾組かのライバルの出現を伝え聞くようになった。もうこれ以上の遅滞は許されなかった。今度が最後の試みになるであろうことは明らかだった。

三月二〇日、私たちは夜行で新宿を発った。列車に落ち着いてから水島は、勤務の都合上週末までしか休めないんだと語った。そうすると、彼は池までも行けないはずだった。私たちのファ

イトを弱めまいとして黙っていたのに違いなかった。そして行けるところまで荷上げを手伝うと言った。

島々に着くと、梓川村の西牧康さんが待っていた。彼はその年の一月の四峰行の時にも進んで池までの荷上げを手伝ってくれたのだが、今度もまたそうしていただくことになっていた。氏の積極的な援助にはまったく感謝のほかはない。沢渡で私たちは徳沢宛の電報を預かった。それは祝電用の電報用紙であり、ライバルの出現を気づかっていた私たちには、なんとも気になる代物だった。何度も出したり収めたりしていたが、山吹トンネルを過ぎたころ、とうとう我慢しきれなくなって封を切ってしまった。それにはなんと、「トウハンセイコウヲシユクス」とあった。徳沢の芳野満彦氏が四峰を狙い始めたことを知っていた私たちには、その意味は明白だった。四峰は登られたのだ。私たちは一時に言い知れぬ虚脱感に襲われるのをどうしようもなかった。

それでもやがて私たちは歩き始めた。四峰は私たちにとって何物にも代えられぬ珠玉であり、たとえもう人の手に触れられてしまったからといって、捨ててしまうことなどまったく考えられなかったのである。しかしその日はとても予定どおりホテルに入る気にはなれず、中ノ湯の風呂場で大騒ぎをやって気を晴らした。

翌二二日、下山する水島と別れ、私たちは徳沢に入った。芳野氏は名古屋山岳会の人たちといっしょに新村ルートを登ったということだった。二晩のビバークのために受けた彼の足の凍傷は、登攀の厳しさを如実に語っていた。その後の二日間は降雪が続き、松高ルンゼは雪崩の危険をはらみ、ルンゼ下まで荷上げするのが限度だった。重い荷を背負ってそこまで登って下さった西牧さんもやがて下山し、二人だけとなった私たちは二五日の夜遅く、ようやく池に上って雪洞を掘った。

二六日は雪となり、正月に残しておいた荷物の整理で一日を過ごした。新村ルートに登られてしまった以上、私たちはどうしても松高ルートに行かねばならないと暗黙の中に認め合っていた。はいたものの、松高ルートの悪さを思うと、ともすれば新村ルートの第二登に甘んじようとする気持ちが起こるのを消し去れなかった。私たちは新村ルートは知りつくしていた。しかし松高ルートが積雪期にどんな状態になるのかまったく知らなかった。その不安はむしろ恐怖に近いものとなり、楽しいはずの雪洞生活は深い憂鬱感につつまれてしまった。「こわいなあ」「うん、いやだなあ」こんな会話が何度か繰り返された。

翌二七日は快晴となったが、その恐怖感はしつこく私たちにつきまとい、雪が不安定だとい

う理由のもとに、ついに出発をとりやめてしまった。そして終日壁を眺めて過ごし、ようやく精神的な余裕を取り戻して来るのを感じた。

三月二八日 快晴のち雪

午前二時、目覚時計のベルでシュラフを這い出すと、今日も満天の星だ。いよいよ登攀の決意を固める。食欲のまったくない胃に飯をむりやりに詰めこみ、三時半雪洞を出る。

本谷へのトラバースは腰まで埋まり、一足ごとに肩で呼吸をするほど苦しかった。やがて松高ルンゼを登って来た二人のパーティーに会い、

前後しながら暁明の本谷を登る。正面壁はモルゲンロートに燃え、異常なほどに私たちの胸を圧しつける。四、五に向かう彼らと別れ、なおも苦しいラッセルを続けてインゼル末端に達し、プリズムでルートを偵察する。私たちは、下半のルートとしては松高パーティーのように甲南第二テラス付近からではなく、明大ルートの下方にある、特徴ある大岩から取り付き、途中で松高パーティーのルートに合してハングに至るルートを取るつもりであったが、夏には容易なハング下までのその部分が、数本の急峻な雪稜に分断され、意外に悪そうに思われた。沢をラッセルして大岩下に達し、ワカンとテルモスをここに捨て、アンザイレンする。

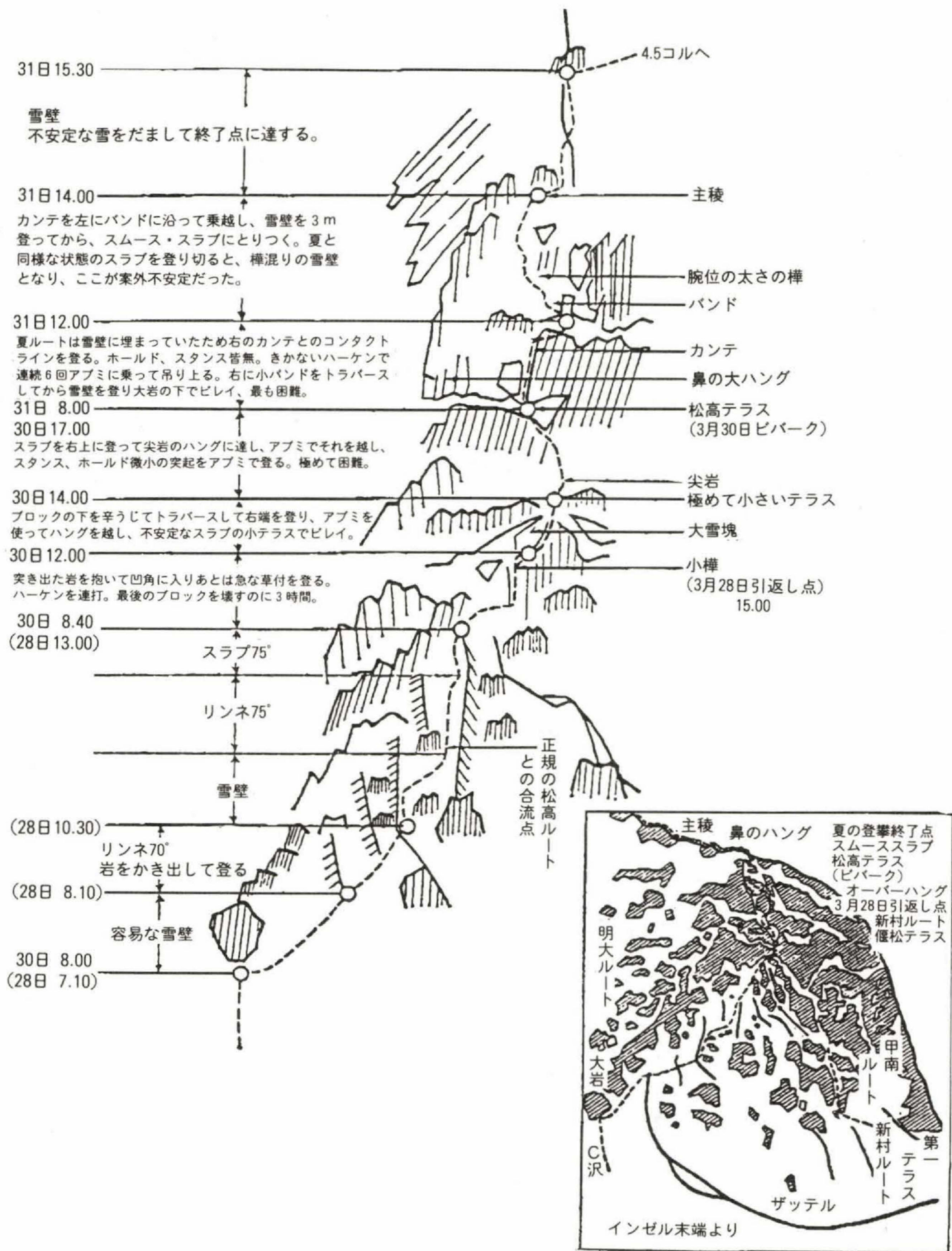
各自の得意に従って、氷雪の部分は永光が岩

の部分は甘利が分担することを決め、七時一分、永光がトップで登攀を開始する。あんなに悩まされた恐怖感は今や全く消え失せ、私たちはいつものように登攀前の快い緊張感に身を任せながら、手ぎわよく三つ道具を身につけた。最初のピッチは急な雪壁をキック・ステップで簡単に登り、第一のスノーリッジに立つ（八時一〇分）。次は小さなスノーリッジを越して第二のスノーリッジまで右上へ二〇メートル。傾斜約七〇度の岩場に新雪がのり、ホールドを掘り出すのに非常に時間を費やし、一〇時半、第二スノーリッジに立つ。

そこからはまずスノーリッジに沿って五メートルほど登り、それからゆるんだいやな雪壁をホールドに苦しみながら右上に登って、第三スノーリッジ左側の浅いリンネ状の岩場に至り、それを吊り上げ気味に強引に直登し、さらにその上の雪をかぶったスラブをハーケン三本ベタ打ちにして這い上がり、第三スノーリッジの上立つ（一三時）。そこから凍った草付にアイスハーケンを叩き込んで三メートルほど登り、さらにハーケン二本を打ってハング下テラスに続くクラックにまわり込む。しかし最後のまわり込みで永光の腕力が尽き、トップを甘利と替わる（一四時）。そのクラックもまた深雪に覆われてホールドが見つからず、ロックハーケんとアイスハーケンを連打してやっとハング下テ

# 松高ルート

(1957年3月31日登攀)



ラスの直下に出る。

テラスは巨大なきのこ状の雪塊に覆われ、懸命にピッケルを振っても一向に片づかない。いつの間にか雪が舞い始め、日は暮れかかり、ぐしよぬれの衣類はガリガリ音を立てている。こんな状態でビバークするのはあまりに無謀だと判断した私たちは、補助ザイルをフィックスして、その日は雪洞に帰ることにした（一七時）。懸垂で取付点に戻ったのは一九時。真暗闇の本谷を、ライトを頼りに這うようにして雪洞に帰った（二〇時三〇分）。

三月二十九日 快晴

この日も絶好の快晴を迎えながら、びしよぬれの衣服と疲れた身体はどうしようもなく、壁を眺めて一日を休養に過ごさねばならなかった。

三月三十日 晴のち雪

五時、再び雪洞を出る。三日続いた晴天に雪は締まってラッセルもなく、八時、大岩下でアンザイレン。ステップは固まり、スタンス、ホルドはすっかり露出して、一昨日の苦勞が嘘のようだった。

前の引返点迄の三ピッチを一時間で登り、問題のハング下テラスの大雪塊に直面する。二本のハーケンで自己確保した永光は、半ば宙に乗り出し、手を替え品を替えてぶちこわしにかか

る。二時間以上の大奮闘の末に、とうとう一坪程のブロックが鈍い音と共に落下し、永光はしたたかに胸を打ったが、ハーケンにぶら下がってかろうじて墜落をまぬがれた。どうにか二人立てる空間ができたので、ハーケンにぶら下がって昼食をとる（一二時）。

ここでトップを交替し、荷を一つにまとめて永光が背負う。まだ残っているブロックの側面を、わずかなブッシュを頼りにトラバースしてクラックに入り、ハーケン三本、アブミ一個を使ってハング直下に立つ。ハングにアブミ二個を使い、予想どおり簡単に乗り越して小テラスでいっしょになる。

その上は松高テラスまでの約一五メートル、最悪を予想したアンサウンドの凹角である。まずハーケンを頼りにスラブを右上に少し登って凹みに入ると、アンサウンドのハングにぶつか。ぐらぐらするハーケンに二段アブミをかけたそれを越すと、次はスタンスの細かな垂壁となり、ハーケンを連打し、アブミを使って吊上気味に着実に登る。その最上部の松高テラスには、また、あのいとわしい雪塊がハング気味にのしかかっている。しかし今度はその下をトラバースできたので、心配するほどのこともなく簡単に左から松高テラスに出ることができた。あたりはすっかりガスに包まれ、時折雪が舞い落ちていた。時計は一七時をまわっていたの

で、予定どおりハーケン陣を敷き、雪をならして幅二尺程のテラスをつくり、ツェルトをかぶってアイゼンを脱ぐ。夜に入ると、雪はあられを混じえて激しさを加えた。明日はどうかなるだろう。この上の部分はどんなだろう。そんなことを気づかいないながら、二人はうつらうつらと眼を閉じていった。

三月三十一日 雪のち晴

夜中、テラス上のハングからひっきりなしにさらさら滑り落ちて来る粉雪で、ツェルトが埋まり、何度も目をさます。背中に落ちて来る粉雪のために、身体は段々前に押し出され、尻の下に敷いていた替手袋の包みがあったという間もなくスーと奈落の闇に吸い込まれてしまった。二時頃から寒気はしんしんとしみ渡り、眠れなままに携燃をたき、登攀食を暖めて断続的に口に入れる。

朝八時、降りしきる雪の中で荷をまとめる。断え間なく滑り落ちて来る粉雪のために、まともにも上を見ることができないような状況の下で、甘利をトップに登攀を開始する。無雪期には容易なテラス上の凹角は、不安定な雪塊が詰まってルートがとれず、その右のカンテとのコンタクトラインを登る。ホルド、スタンス共になく、ほとんど一メートルおきにハーケンを打ち、アブミ、吊り上げの連続使用で這い上がる。松

高ルート中最悪の八メートルだった。

それからは夏と同様にカンテを右にまわり込み、ビレーング・ハーケンの見える大岩の下に達した(一二時)。トップは夢中でわからなかったが、このわずか一〇メートルのピッチになんと四時間を要していた。いよいよ最後のピッチにかかった。大岩上の小バンドを左上し、いわゆる「スムーズ・スラブ」に取り付く。ハーケン階段を伝わり、機械体操の要領で太い樺の上に乗る。夏の終了点が目の前に見えてきた。

そこまで来て私たちはなぜか急に恐怖を感じた。理由はまったくわからぬままに、トップの身体はこわばり、簡単なブッシュ伝いの草付をぎこちないバランスで登り、一四時間目に、ついに夏の終了点に達した。

残ったハーケンはわずかに六本。それも満足なものではなかった。私たちは三〇本のハーケンを打ち、前からあったものを加えると、五〇本近いハーケンを使っていたのだった。風雪の中で固い握手を交わしたが、予期した感激はなかった。新雪に埋まった隣のCルンゼは絶え間ない雪崩の音を響かせ、私たちは今や無事に帰る事に全神経を使わねばならなかったのだ。

まず明大ルートを下降するつもりで左にトラバースしてみたが、風雪の中ではこのルートをつかえなかった。今度は右に主稜の末端へトラバースし、今にも足元から崩れそうな不安定な

スノーリッジを登り、どうやら大岩の根元のシュルンドに入ることができた。

そこで私たちは壁に取りついて以来、初めて危険からの解放をほのぼのと感じ始めた。先着した私は確保のザイルをたぐりながら何度か眠りこみ、下からの合図にはっと我に帰る始末だった。風は激しく荒れていたが、高い空には晴れ間が見え始め、凍った手袋の中の指は感覚が薄れたが、もうポケットの中に手を突っ込むこともできるのだ。

そしてその解放感は一四・五のコルに立った時に爆発した。腰までもぐるルンゼの中を二人は一散に駆け降りて行った。

註一 本稿は、甘利さんが、紫峰山岳会(都立立川高校山岳部OB)永光俊一氏と二人で、前穂四峰正面の最後の牙城と云われた、難攻不落の松高ルートの積雪期初登攀に成功した時の貴重な記録である。そもそも「山と溪谷」二二六号(昭和三十三年四月号)に発表されたものだが、登攀自体が、戦後アルピニズムのエポックを画するものと高く評価されたこともさることながら、文章が臨場感に溢れ、甘利さんのこの岸壁に打ち込んだ情熱と意欲が、独特の詩情を折り込んで卒直に描かれており、甘利さんの代表作として、われわれの共通の想い出に転載させてもらった(編集委員)



# 会務報告

## 一、会員住所異動

金子 晴彦 S 46年卒

(勤務先) JAL HK

〒八五二-二八四七-四五二五

藤本 敏行 S 51年卒

〒二二七 横浜市青葉区青葉台

〒二二九-二二〇一

〒〇四五-九八五-四一五二

佐藤活朗 S 53年卒

(勤務先)

The Overseas Economic Cooperation Fund,  
Islamabad Office

World Bank Building, 20-A Bank Road,

G/5-1, Islamabad, Pakistan

TEL: Islamabad 819781~6 (W.B.) (Ext. 409)

FAX: 92-51-822546

国内連絡先: 〒二二 横浜市旭区さちが丘四一五

佐藤三千雄方

電話: 〇四五-三六五-〇六五六

自宅 電話 九二-五-一八二-八二三

米田 篤裕 S 55年卒

(勤務先) 秘書室

〒〇三-三二八七-九〇一四

小林 修 S 56年卒

〒一七九 練馬区早宮四-三-一

ライオンズガーデン豊島園七〇八

(勤務先)

〒〇三-三九九二-二二二〇  
三菱商事(株)

自動車第一部中南米チーム

〒〇三-三二一〇-七八六四

宮下 克彦 S 57年卒

〒二七三

船橋市東船橋六-二-一〇

三井物産東船橋社宅一一一

〒〇四七四-二二-七八一九

(勤務先)

三井物産(株) 厚板鋼管第一G

〒〇三-三二八六-二四一九

岡部 晃和 S 58年卒

(勤務先)

金融法人部

〒〇三-三二二一-六二八四

安島 孝知 S 59年卒

〒一六六

杉並区阿佐ヶ谷南一-二五-二五

〒〇三-五三七七-〇一一四

鮎沢 政文 S 63年卒

〒三八〇

長野市三輪五-一三八

信毎アパート一〇三

〒〇二六二-三七-四九八二

(勤務先)

信濃毎日新聞社

〒〇二六二-三六-三三三〇

FAX 〇二六二-三六-三一九八

古田 茂 H 7年卒

〒一八六

国立市東三-一三-二

皐月荘二〇一

〒〇四二五-七七-八九三七

## 編集後記

この夏に久保さん甘利さんと訃報が続いて届きました。

編集人自身にとつても、大学に入学した際の新入部員歓迎コンパに甘利さんが来られ、あの笑顔で山の話語られた姿が今でも目に浮かび懐かしく感じられてなりません。

改めてご冥福をお祈りします。





